キジ舎の変遷と今後の飼育管理

○圓山あおい　伊藤咲良
（横浜市立よこはま動物園）

当園で飼育しているキジ・ハト類は個体数を維持することが課題であり、現在羽数が減少している種、維持できている種、増加している種と様々である。さらに、開園以降個体数が維持できず、飼育数0となった種もある。しかし、これらの個体数の経過についてまとめられたものはなく、今後、飼育種数・個体数を維持するための方針を検討するうえで必要である。また、オウギバトに関しては JAZA の計画管理種であり、現在全体の約 3 分の 1 が当園で飼育されている。当園個体群の遺伝的多様度を把握・維持すること、今後飼育羽数をどのように管理するかを検討する必要性がある。

そこで、飼育数0となった3種と現在飼育している3種の個体数経過の比較と、PMx を用いて当園のオウギバトの遺伝子多様度と 20 年後まで遺伝的多様度を高く維持するためのシミュレーションを行った。個体数の経過については、個体数維持が困難であった種ほど一度に得た繁殖子の数が多く、生存年数が短かった。維持出来ている種は数年間隔で繁殖子を獲得していた。当園オウギバトの遺伝子多様度は 82.4%であった。遺伝子多様度をさらに高く維持することは既存の飼育スペースでは困難であると考えられた。

今後、キジ・ハト類個体数を維持するためには、現在個体数を維持している種の個体数経過を最適例として他の種にも反映していく必要があると考えられた。また、オウギバトの個体群を大きく、かつ遺伝多様性を高く維持するには計画的に搬出していく必要がある。